

出現と痕跡

—パリ外国宣教会を手がかりに

蜷 川 順 子

Apparitions and Traces

—with reference to the *Missions Étrangères de Paris* (MEP) as a clue

NINAGAWA Junko

The early Christian artworks that were brought to Japan in the 19th century by the members of the MEP were influenced by reports of apparitions of the Virgin of the Immaculate Conception, apparitions that appeared intermittently in France around 1830, the year when Catholicism lost the state-religion status that it had had since the church's revival in 1814. Missions to Japan were commissioned for the MEP in 1831 by the Congregation for the Propagation of the Faith in Rome, though these missions were previously believed to have started after 1858, the year when the Treaty of Amity and Commerce was established between Japan and France. In 1865 the so-called hiding Christians appeared before the French preacher Petit-Jean of the Church of Oura, Nagasaki. They were the descendants of people who had kept their Christian faith in the 16th century, and their appearance deeply surprised the Christian world in Europe. Here I discuss the meanings of the Virgin's apparitions in France and of the appearance of the hiding Christians. I also treat of Christian objects such as medals, rosaries, and statues that were confiscated at the end of the 19th century when the hiding Christians who re-emerged too early were arrested and exiled to different places.

キーワード：日本再宣教 (Revived missions in Japan)、パリ外国宣教会 (*Missions Étrangères de Paris*)、聖母の出現 (Apparitions of the Virgin)、無原罪の宿り (the Immaculate Conception)

0 はじめに

2015年3月17日、長崎市にある大浦天主堂において、ローマ教皇特使なども司式者に加わった「信徒発見」150周年記念ミサが執り行われた。聖母行列や講演会、巡礼など、この出来事を記念する様々な行事がおよそ一年間にわたって繰り広げられ、また記念日をはさむ期間に長崎県立美術館では、記念事業の一環として『聖母が見守った奇跡』展が開催された¹⁾。

「信徒発見」というのは、16世紀末から17世紀前半にかけて豊臣秀吉や徳川幕府によって発令された一連の禁教令以来、いわゆる「潜伏キリシタン」として信仰を守ってきたキリシタンたちが、大浦天主堂を完成させたパリ外国宣教会のプチ・ジャン神父の前に出現した、1865年3月17日のできごとを指している。この事件は、ヨーロッパのキリスト教社会を大いに驚かせたのだが、まだ禁教令が有効だった時期の日本で彼らがその姿を現したために、やがて浦上四番崩れと呼ばれる弾圧を招くことになった²⁾。一般に、日本でのキリスト教再宣教の時系列が語られる場合、開国に伴ってまず西洋の商人や外交官たちが日本に居住するようになり、次にかれらの精神生活を安定したものとするために聖職者の入国も認められた、という流れで論じられることが多い。しかしながら実際には、日本再宣教の試みは、日本の開国よりもはるかに早い段階から議論されはじめている。すなわち、フランス革命期のカトリック受難の時代に、ヨーロッパのカトリック教会は、日本のキリシタン弾圧に代表されるような過去の信者の苦難を思うことで危機を乗り越え、日本を含めた新たな海外布教を鼓舞することで、ヨーロッパにおける信仰を新たに促そうとしたのである³⁾。

ここでは、19世紀のキリスト教世界を驚かせた日本の「信徒発見」という奇跡を「聖母が見守った」とされる意味に関して、それを19世紀のフランスに特に数多く見られた「危機のときの聖母の出現」の物語と共振させながら扱う。そのために、第1章で日本再宣教とパリ外国宣教会の関係、また第2章で16世紀の日本布教を担ったイエズス会とパリ外国宣教会の関係を扱

1) 信徒発見150周年記念事業実行委員会発行の各種パンフレット、および「信徒発見」150周年記念事業、世界遺産推薦記念特別展覧会図録『聖母が見守った奇跡—長崎の教会群とキリスト教関連遺産』長崎歴史文化博物館、2015年、を参照。

2) 片岡千鶴子「キリシタン発見物語」『NHK 国宝への旅』4、NHK出版、1986、52-59頁；拙著「日本とキリスト教美術：大浦天主堂にもたらされた二体の聖母像」『EUと日本学～「あかねさす」国際交流』関西大学出版部、2012年、175-200頁。「潜伏キリシタン」と「隠れキリシタン」との関係については、若桑みどり『聖母像の到来』青土社、2008年、293-331頁。

3) *Les Missions Étrangères, Trois siècles et demi d'histoire et d'aventure en Asie* [以下、MET と略], Paris: Perrin, 2008, pp. 160-169. このころの海外宣教を鼓舞する思想については、フランソワ＝ルネ・ド・シャトーブリアン『キリスト教精髓』創元社、1949年、を参照。

い、第3章において本論の論題に関わる「出現とヴィジョン」を論じることにしたい。

1 日本再宣教とパリ外国宣教会

(1) 日本再布教計画

日本再布教計画が、ローマの布教聖省によってパリ外国宣教会に委託されたのは1831年のことである。翌年設置された朝鮮代牧区から日本にわたることが画策されたが、これは1839年に朝鮮で起こったキリスト教大迫害により断念された⁴⁾。その後、マカオにあるパリ外国宣教会極東支部は、アヘン戦争に勝利したイギリスに対抗するようにアジアでの活動を活発化していたフランス・インドシナ艦隊のセシユ提督の提案で、将来の日本布教の布石となるよう、1844年にフォルカード神父ら2名を琉球に送りこんだ。しかしながら、日本語学習・布教活動ともに十分な成果をあげられず、健康を損なった神父はフランスに帰国した。フォルカード神父は、フランスに戻った後にヌヴェール司教（在任：1861-73年）になった際、ルルドにおける聖母の出現先であった少女ベルナデットに修道生活を勧め、ヌヴェール愛徳姉妹会への入会を促した人物としても知られ、また、生涯、日本の再布教のために祈りを捧げたと伝えられる⁵⁾。

このことは、パリ外国宣教会と、19世紀のフランスで起こった一連の聖母の出現と、日本の再宣教とが、何らかの形で繋がっていることを示唆しているように思われる。

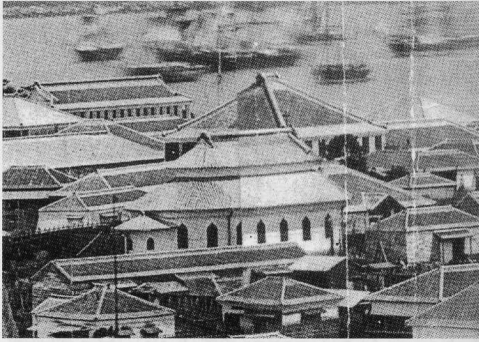
(2) 横浜天主堂と聖心の聖母像

日本再宣教の試みはさらに続けられ、日仏通商条約が締結された1858年には、日本上陸が実現されていないにも拘わらず、ジラル神父が日本代牧（教区長代理）に任命された⁶⁾。神父は、1860年になってようやく、最初のフランス代表部を開設したベルクール総領事の通訳として入国を果たすが、滞在地も準備されていなかったために三田の済海寺に寄宿しながら、横浜在住の信徒グラヴェルトの協力を得て、密かに聖堂建設の準備を始める。彼らは、横浜フランス人居留地80番で天主堂建設を開始し、1861年クリスマスにその聖堂を「イエスの聖心」へ献堂することにした（図1）（図2）。しかしながら、建設に尽力したグラヴェルトに対する刃傷事件

4) MET, *op.cit.*, pp. 149-153.

5) Gilles van Grasdorff, *A la découverte de l'Asie avec les Missions étrangères*, Paris: Omnibus, 2008, pp. 736-770. 中島昭子「フォルカード神父とカトリックの日本再布教」『キリシタン史の新発見』岸野・村井編、雄山閣出版、1996年、102頁。

6) 代牧とも呼ばれる使徒座代理区長（vicarius apostolicus）の意味については、坂野正則「一七世紀中葉におけるカトリック宣教戦略の再編—パリ外国宣教会と亡命スコットランド人聖職者—」『史学雑誌』120（10）、2011年、61-64頁。



(図1) ベアト撮影「建設当初の横浜天主堂」



(図2) 山下町(旧居留地)80番地に立つ《聖心のイエス》像

が起こったために、献堂式は翌62年1月まで延期された。式典に際しては見物のために日本人も集まり、また、聖堂内に入りこんだ彼らに宣教のチラシが配布されるなどしたため、禁教令の元で数多くの日本人が逮捕された⁷⁾。

ジラル師は帰仏して、ナポレオン3世や教皇ピウス9世を通じて、逮捕された日本人への罰の軽減を幕府に申し入れた。このとき、再宣教の出発点となる横浜天主堂の献堂を祝して、かねてよりフランスを中心に列聖運動がすすめられていた日本の26聖人の列聖が認められた⁸⁾。また、同年10月には鐘が、68年には鑄鉄製の聖母像(図3)がフランスから贈られ、この聖母像は三角形の破風の上に設置された(図4)⁹⁾。これらの宗教具は、再宣教の動きの中で日本に

7) 横浜天主堂献堂・カトリック山手教会150年史編纂委員会『横浜天主堂献堂150周年記念誌、横浜天主堂・カトリック山手教会150年史』カトリック山手教会、2014年、4-7頁。

8) ローマでおこなわれた16世紀の日本における26殉教者の列聖は、当時の日本に知られていなかったことから、まずはフランスでの文脈で意味があったことだと思われる。

9) 横浜天主堂、前掲書、8-15頁。62年に建てられた聖心聖堂は、修繕・改築を重ねて、1898年に内装・外観ともに大改装がおこなわれたが、1906年に山手44番地に移設され、《聖心の聖母》像は庭に置かれることになった。



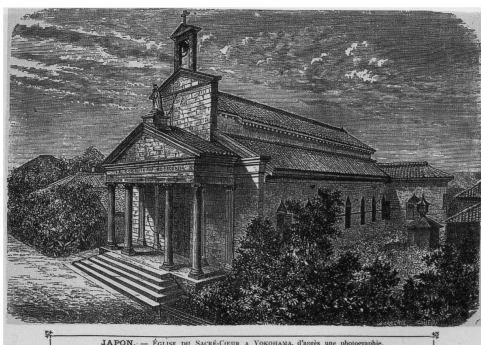
(図3) 横浜山手教会の庭に置かれた
《聖心の聖母》像

もたらされた、キリスト教美術作品だとみなすことができる。

(3) 大浦天主堂建設

26聖人(図5)の列聖が認められた後、パリ外国宣教会の関心は彼らの殉教の地である長崎にも向けられた。当時は彼らの殉教地もあきらかになっていなかったため、その場所を確定し、聖人たちに捧げる聖堂建設が急務とされたのである。

1862年11月には、フューレ神父とプチ・ジャン神父が横浜へ到着し、翌年一足先に長崎入りしたフューレは聖堂建設のための土地の購入や建設業者の策定などに奔走したが、思うように事が進まず、彼は失意のうちに同年帰国する。遅れて7月に長崎入りしたプチ・ジャンは、聖堂建設よりもむしろ殉教地探しに奔走する中、長崎市西丘の地を探りあてる。同時に彼は、帰国したフューレが残した聖堂建設の仕事を、後から到着したローカーニュ神父とともに推し進



(図4) 聖心聖堂の屋根の上に置かれた《聖心の聖母》像、創建当時の横浜天主堂(銅版画)横浜開港資料館



(図5) 《26聖人処刑の場面》17世紀、壁画、クエルナバカ大聖堂(メキシコ)壁面の漆喰の下から1961年の修復時に発見された。現在、長崎市西丘の殉教地の向かいに立つ日本二十六聖人記念聖堂は、メキシコ人のフランシスコ会士フェリペ・デ・ヘススに献堂されたものである。

め、1865年2月19日に日本26殉教者聖堂（大浦天主堂）の献堂式を執りおこなった¹⁰⁾。横浜天主堂で起こったような事件の再発を警戒してか、幕府の警備は厳しく、見物人はほとんどなかったようだが、巷ではフランス寺と呼ばれて話題になっていたことが知られている¹¹⁾。

（４）大浦天主堂と二体の聖母像

当時の写真を見ると、三塔式の大浦天主堂は、日本家屋の葺の波をはるかに超えて聳え立っている（図6）。左右の塔に比べてアンバランスな威容を放つ中央の塔は、居住地のフランス人信徒というより、すでにその情報が得られていた「潜伏キリシタン」に向けてのものだったと見られている。ファサードに天主堂という漢字を横に並べている点にも、このことがうかがえる（図7）。ファサードの基本デザインは、パリのサン＝ロラン聖堂（図8）の折衷的バロック様式をモデルとした可能性が高いが、一見格子状に見える一階部分の独特の壁面には、地元伝来のナマコ壁が用いられている¹²⁾。周辺での火災が続いた横浜天主堂の先例に鑑み、その防火効果が期待されたのではないかと思われる¹³⁾。

この聖堂には創建時にフランスから送られた聖母子像が設置された（図9）。慈愛を表す赤い內衣に、天の女王としての性格を示す金の星をちりばめた青い外衣を纏った聖母が、伏し目がちに幼児イエスを両手で抱えている。



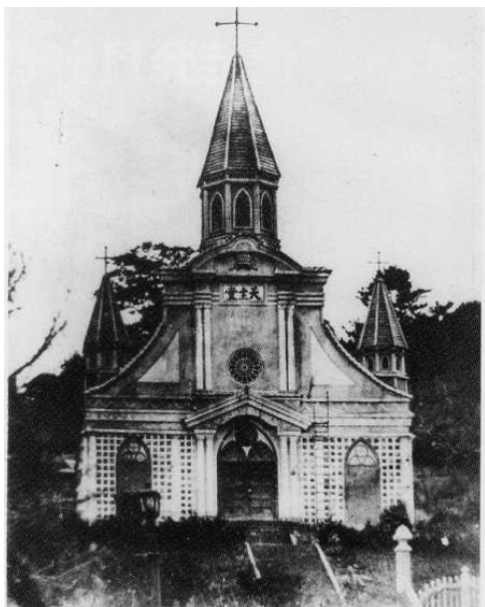
（図6）「明治初年の大浦天主堂付近」二階建て洋風の司教館や妙行寺などが見える。キリシタン資料館、大浦天主堂

10) フェーレヤプチ・ジャン、および建築を請け負った小山一族については、桐敷真次郎『大浦天主堂』中央公論美術出版、1968年、6-22頁。

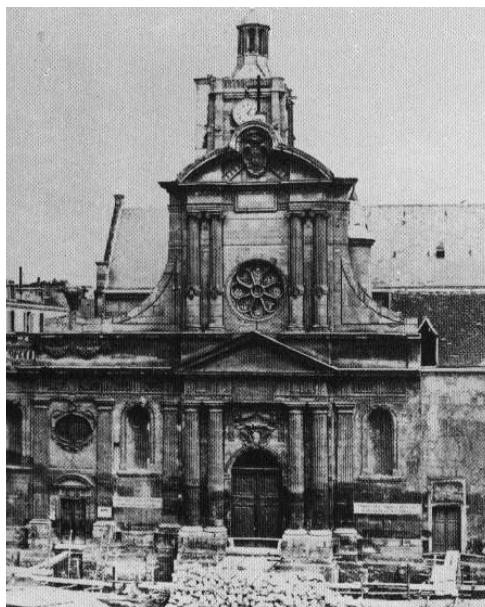
11) 『プチジャン司教書簡集』純心女子短期大学長崎地方文化史研究所編、純心女子短期大学、1986年、57頁。

12) 太田静六『長崎の天主堂と九州山口の西洋館』理工図書、1982年、143-146頁によれば、直接的祖型を言い当てるのは難しいとされる。サン＝ロラン聖堂を指摘したのは、土居義岳「パリと長崎の教会堂建築の類似性に関する一仮説、パリ外国宣教会に関する研究 その1」『日本建築学会大会学術講演会梗概集（東北）』2009年、103-104頁、また1862-63年にコンスタン＝デュフによって改築される前のサン＝ロラン聖堂の写真は、以下のURLを参照。https://fr.wikipedia.org/wiki/%C3%89glise_Saint-Laurent_de_Paris その一方で、上海の聖堂にルーツがあるとしたのは、藤森照信『建築探偵神出鬼没』朝日文庫、1997年、11頁、である。

13) 横浜天主堂付近の火災などについては、横浜天主堂、前掲書、7頁。



(図7) 上野彦馬撮影「創建当時の大浦天主堂」
1865-68年、



(図8) サン＝ロラン聖堂、パリ、1862-63年にコ
ンスタン＝デュフによって改築される前
のファサード。

対照的に大きな身振りの幼児は、両手を広げて信徒たちを迎えているように見える。両手を広げた身振りは、とくにトレント公会議以降のイエスや聖人の像に多く見られる（図10）。

ここで目を転じて、少なくとも3点のヴァージョンが残る16世紀の《マリアの十五玄義図》（図11）を仔細に眺めるなら、〈博士たちの中のキリスト〉（図12）や〈キリスト昇天〉（図13）に両手を広げるイエスの姿を見ることができる。これらの場面は異教徒の論駁や、異言語での宣教を意味する聖霊降臨を予告する場面であるため、海外の宣教に際して強調された可能性が高く、メキシコに残る画像でも類似の身振りを見ることができる（図14）。

19世紀の聖母子像の制作者に関する詳細は不明であるが、宣教会が過去に用いられた典型的な身振りのイエス像を選択した可能性が高いだろう。

浦上に潜伏していたキリシタンが、「サンタ・マリアの御像」のあるフランス寺に「出現」したのは、実際、浦上キリシタンが受け継いできた伝承に依るところが大きい。その骨子は「1）七代経ったらパードレ（神父）様がローマから船でやってくる。2）そのパードレ（神父）様は独身である。3）サンタ・マリアの御像を持ってやってくる」という、3つの点にある¹⁴⁾。

14) 片岡1986、前掲書、53頁。



(図9) 《信徒発見の聖母子》、大浦天主堂



(図10) フィリップ・ド・シャンパーニュ《聖母と産着にくるまれて立つイエス》1659年(?)、素描、赤チョーク、白のハイライト、23.6×17.6cm、ルーヴル美術館(パリ)



(図11) 《マリア十五玄義図》17世紀初頭、混合技法、73.9×61.9cm、京都大学総合博物館



(図12) 「博士たちの中のキリスト」 図11の部分



(図13) 「マリア昇天」 図11の部分



(図14) 「博士たちの中のキリスト」、フランシスコ・デル・カスティージョ《ロザリオの聖母》に描かれた十五玄義の一つ、18世紀、ヌエボ・エスパーニャ、メキシコ大聖堂

プチ・ジャンは信徒発見を記念して、さらにフランスから「日本の聖母」(図15)と呼ばれるようになる聖母像を取り寄せ、1867年6月2日に建立の式典を執りおこなった。クーザン神父の記録によると、「このとき庭園には大勢の日本人がいて」夜になるとイルミネーションが飾られ、「光の中に聖母が輝かしい女王のように現れてたかのようだった」と記している¹⁵⁾。

1865年に「出現」した浦上信徒たちは、その後およそ3年間に4か所の秘密礼拝堂を設置して、秘密裏に洗礼やミサをおこなったが、中には公然と信仰を表明し、旦那寺の僧侶の立会いなしに肉親を自葬する者が現れた。このことが引き金となって、1867年7月に浦上村の信徒68人が捉えられ、拷問を受けて、棄教を迫られた。これが上述した浦上四番崩れの始まりである¹⁶⁾。

来日したフランス人神父たちは宣教のための大量の十字架やメダイ、ロザリオばかりでなく、礼拝堂を飾るための石膏製小像を持ち込んで、浦上の信徒たちにも渡したものと思われ、1867年の没収品の中には、頭部や手足が破壊されているが、髷の彫り跡からヨーロッパ製であることがあきらかな像が残されている(図16)。また、没収品に数多くあるロザリオは、長さ30センチから40センチの真鍮製規格品で、中にはメダイがついているものもあり、ほとんどが1830年代に制作されたものであるが、このことには後に触れることになる(図17)¹⁷⁾。

1868年4月に明治新政府は神道を国教とする方針を出して、キリシタン禁制政策を江戸幕府から引き継ぎ、諸外国からの中止を求める申し出にも拘わらず、浦上キリシタンを総流罪にすることが決定された。彼らは計20藩22か所に分けて流され、過酷な処遇を受ける者もあった。しかしながら、とくに、1871年12月に海外視察に出た岩倉具視使節団が、諸外国でキリシタン



(図15) 《日本の聖母》大浦天主堂

15) 五野井隆史他監修『旅する長崎学4、キリシタン文化IV、「マリア像が見た奇跡の長崎』長崎文献社、2008年(初版2006年)、5頁。

16) 桐敷、前掲書、28-30頁。展覧会図録2015、前掲書、96-98頁。

17) メダイを授けたことについては、書簡集、前掲書、64頁、メダイが持ち込まれたことについては、関根浩子「日本における模造ルルド発生考—パリ外国宣教会の日本における再布教との関係から」『崇城大学芸術学部研究紀要』7(2013年)、56-57頁。展覧会図録2015、前掲書、64-69頁。



(図16) 《聖母像》19世紀、ヨーロッパ製、石膏、高さ13.2cm、東京国立博物館、1867年に浦上村切支丹より没収された彫像。「光の聖母」と思われる。



(図17) 《ロザリオ》19世紀、ヨーロッパ製、珠：木製、鎖、金具：真鍮製、メダイ：真鍮製1、銅製1、長さ40.0cm、東京国立博物館、浦上にて没収。メダイに1830年銘記がある。

釈放を求める強い抗議を受けたことから、73年3月までに浦上信徒は釈放された。このときは完全に信教の自由が認められたわけではなく、禁教の高札が撤去されたただけだったが、屋敷や財産を没収され苦しい生活を強いられる中でも、次第にキリスト教信者の数は増え続けた¹⁸⁾。

信徒数の増加に伴い、大浦天主堂が拡張の必要に迫られたとき、プチ・ジャン司教は旧聖堂を破壊して新築するのではなく、信徒発見につながった記念すべき聖堂を残すために、これをすっぽりと包み込む形で聖堂を拡張することにした。明治12（1879）年、司教とポアリエ神父による設計指導の下、天草出身の丸山佐吉と浦上村信徒の溝口一造が大工の棟梁となって建設がすすめられた¹⁹⁾。

ファサードは、バロック式ではなく、ネオ・ゴシックに新古典を加味した折衷様式（図18a）で、三つのランセット窓に対応して、内部は三廊式に整えられた（図18b）。身廊の五つのベイ

18) 五野井、前掲書、2頁。

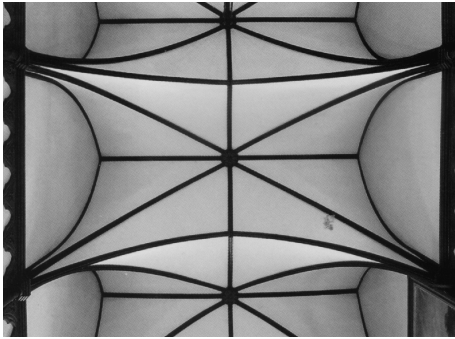
19) 桐敷、前掲書、31-36頁。



(図18a) 新聖堂ファサード、大浦天主堂



(図18b) 新聖堂内部、三廊式、大浦天主堂



(図19) 新聖堂内部、身廊部天井、大浦天主堂



(図20) 身廊部の天井、竹小舞下地、大浦天主堂



(図21a) 聖ヨセフ聖堂
(四川南路若瑟堂) 正面ファ
サード、上海



(図21b) 聖ヨセフ聖堂、イエ
ズ会の表徴、上海



(図22) 聖ザビエル聖堂 (董家渡天主堂)、
上海

は8分分割のリヴ・ヴォールトからなる天井で覆われ(図19)、その曲面は竹小舞下地を用いた本邦初の施行例として報告されている(図20)²⁰⁾。

この木製リヴ・ヴォールト制作技術のルーツは不明とされるが、藤森照信は、長崎と密な交流があった上海にある、1864年にルイ神父によって献堂された四川南路若瑟堂(聖ヨセフ教会、上海四川南路36号)(図21a)が、ルーツの一つではないかと指摘している。現在は小学校の敷地内であって、ミサのときにしか入ることのできないこの聖堂の中央には、イエズス会の表徴が掲げられている(図21b)。また、再宣教時代における上海最古の教会、1852年にスペインのジャン・フェランが設計した董家渡天主堂(聖ザビエル教会、上海董家渡路189号)(図22)もイエズス会によって建てられたものとされている²¹⁾。わが国にイエズス会が再来日するのは1908年のことだが、上海の聖堂建設に関わったイエズス会と、日本での建設に関わったパリ外国宣教会は歴史的にどのような関係にあるのか、聖像の意味を考察する前に少し振り返っておきたい。

2 イエズス会とパリ外国宣教会

15世紀後半の新航路の発見に伴い、いち早く海外進出を果たしたスペインとポルトガルは、カトリック教会の海外宣教においても先駆的な役割を果たすが、布教保護権の下で宣教事業はもっぱら植民者に管理され、王権の同意なしには司教の任命、司教区の設置、宣教師の派遣をおこなうことができなかった²²⁾。

中南米では、スペイン国家がすすめる植民・征服事業において、数々の不正行為や先住民インディオに対する残虐行為がおこなわれていた。これに対して、サンド・ドミンゴ在住のドメニコ会士アントニオ・デ・モンテシーノスや彼に触発されたラス・カサスは、先住民の保護、労務の軽減や、植民事業を支えるエンコミエンダ制の廃止を訴え続けたが、植民者の猛反発を招いた²³⁾。

こうして、インディオスの征服を巡り熾烈な論争が戦わされているときに、近世のアメリカ大陸でもっとも影響力のある聖母が、1531年12月9日にメキシコの改宗インディオ、ファン・ディエゴに現れた²⁴⁾。聖母が聖堂建設を求めることや、出現を信じない人に奇跡を示す——この

20) 林一馬「建物遺構」『大浦天主堂及び教会施設調査報告書』長崎市、2012年、47-48頁。

21) 藤森、前掲書、8-22頁。

22) 坂野2011、前掲書、59頁。

23) ラス・カサス(石原保徳訳)『インディアス破壊を弾劾する簡略なる陳述』現代企画室、1987年。

24) *Miradas Guadalupanas*, ed. by Promoción Culutral Guadalupe A.C., Mexico: Consejo Nacional para La



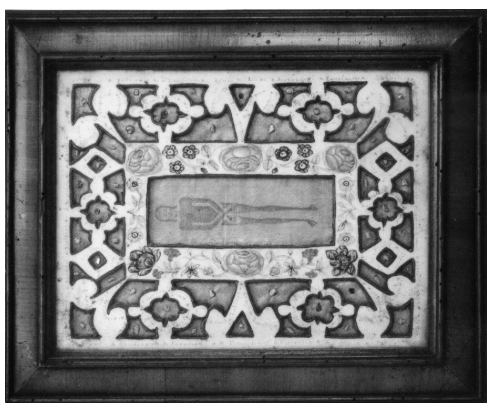
(図23a) 《グアダルーベの聖母》グアダルーベ大聖堂 (メキシコ)



(図23b) 《ファン・ディエゴのmantóに写ったグアダルーベの聖母を崇敬するデ・ズマラガ司教》彫像、グアダルーベ大聖堂庭園内 (メキシコ)



(図24) 偽アブガル《マンデュリオンを崇敬するシリアのアブガル王》『主の汗拭きの歴史』13世紀第4四半期、ローマで制作、パリ国立図書館 Ms. Lat. 2688



(図25) 《トリノの聖骸布の小型コピーがある遺骨入れ》18世紀、メヘレン大司教コレクション、ベルギー

Cultura y Las Artes, 2003. 黒田悦子「宗教的シンボルと複製品および巡礼者の祈願媒体に見る民族芸術—スペイン、メキシコ、メキシコ系アメリカ人の巡礼センターの例から」『民族芸術』24 (2008)、60-62頁。

物語を要約するなら、インディオのファン・ディエゴに現れた褐色の肌の聖母が、メキシコ・シティのデ・ズマラガ司教のところに行って聖堂建設を頼むよう、彼に告げる。司教は、最初は彼の言葉を信じなかったが、親戚の病の治癒や冬に咲く花の奇跡によって信じるようになり、聖堂が建てられた、というものである。このとき、聖母の姿がファン・ディエゴのmantóに写ったとされる。

「無原罪の宿り」とは逆に、「グアダルーベの聖母」の場合は、懐疑的なフランシスコ会に対しドミニコ会が擁護の論陣を張り、結局1754年に、法王の勅令で12月12日がグアダルーベの聖母の祝日に定められた。

場合は、病の治癒や冬に咲く花——点で、ローマのサンタ・マリア・マッジョーレ大聖堂の造営譚に登場する「雪の聖母」と共通するものがある。しかも、「グェダルーペの聖母」と呼ばれるこの聖母（図23a）は、インディオのマントにその姿（図23b）が写ることで、イエスの顔が写ったマンデュリオンやヴェロニカの聖顔布（図24）、あるいはトリノの聖顔布にも共通する要素を備えているのである（図25）²⁵⁾。

インディオに対する神の恩寵を意味するこの物語は、とくにドメニコ会の支持を得て広まることになる。こうした宣教師の告発や奇跡譚の登場を背景に、1537年、ローマ教皇パウルス3世は、インディオは理性ある人間として扱われるべきという回勅を発し、植民地におけるインディオへの迫害を禁じたが、植民地者たちは顧みることがなかった。

1568年にようやく教皇ピウス5世は、従来スペインのインディアス支配の根拠とされていたアレクサンデル6世の「贈与大勅書」がインディアス征服を正当化するものではないという、ローマ教皇庁の正式見解を示した²⁶⁾。他方ピウス5世は、ヨーロッパで長らく民間信仰として人気が高かった「雪の聖母」に公式の祝日を設けた教皇でもある。

「雪の聖母」（図26）や「枯れ木の聖母」（図27）といった伝承上の聖母出現物語は、世俗権力が強くなった15世紀のヨーロッパ各地で、社会的に影響力の強さまざまな信心会組織の求心力として機能することになる²⁷⁾。16世紀になって宗教改革のために大きな痛手をこうむったカトリック教会は、危機の時代に出現する聖母とその痕跡としての像への崇敬というレトリックを、この頃から正式に採用しはじめたように思われる。

ところで、中南米において植民者と宣教師との確執が続く一方、極東の日本においては、イエズス会のフランシスコ・ザビエルによってはじめられた宣教活動が引き続き軌道に乗るかと思われた。「雪の聖母」の祝日はわが国にも伝えられており、長崎、外海のバスチャンの暦にも8月5日のこととして記されていた。また「雪の聖母」と呼ばれる、わが国で制作された聖母

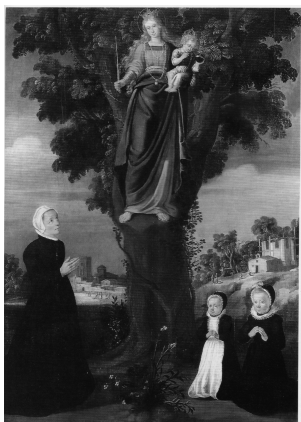
25) 拙著「神の肖像—ヤン・ファン・エイクの《聖顔、あるいはイエスの肖像》」『初期ネーデルランド美術にみる個と宇宙Ⅰ〈人のイメージ〉共存のシュミラークル』ありな書房、2011年、7-36頁；水野千依『キリストの顔、イメージ人類学序説』筑摩書房、2014年、を参照。

26) インディアスの状況に関する、ヨーロッパにおける論争については、石原保徳「解説Ⅱ インディアスの再発見にむけて」ラス・カサス、前掲書、204-281頁。

27) 河原温は名士クラブの兄弟団としてこれらの兄弟会をあげている。河原温「中世ネーデルランドの兄弟団について」『日蘭学会会誌』22（1）、1997、69-83頁、とくに73-74頁を参照。「雪の聖母」については、同著者「中世ブルッヘの兄弟団と都市儀礼—15世紀「雪のノートルダム」兄弟団の活動を中心に」深沢克己・桜井万理子編『友愛と秘密のヨーロッパ社会文化史—古代秘儀宗教からフリーメイソン団まで』東京大学出版会、2010年、109-132頁。



(図26) 逸名の画家《雪の聖母》
19世紀、複製画像



(図27) 逸名の画家《枯れ木の
聖母への祈念画》1615
年頃—1620年、油彩、
板、113×83cm、アウ
デ・スロット博物館、
フェルトホーフェン
(オランダ)



(図28) 南蛮絵師《雪のサンタ・
マリア》17世紀

画像（図28）が残されている²⁸⁾。

しかしながら周知のごとく、日本では17世紀初頭にヨーロッパ宣教師が排除され、教会組織はほぼ全滅した。これは、スペインやポルトガルの植民布教活動を支えていた布教保護権に基づく宣教活動の、決定的挫折を意味した。

ローマ教皇グレゴリウス15世は、1622年1月に布教聖省を設立し、イベリア諸国とは異なる形で、世界宣教の新たな戦略を構築しようとした。同年3月にザビエルを列聖した教皇には、イエズス会などの修道会活動を制限するというより、世界布教におけるイベリア諸国の影響力を弱めようとするねらいがあったものと思われる。布教聖省の初代秘書フランチェスコ・インゴリは、宣教活動に従事する修道会に年次報告書の提出を求めることで宣教事業全般を管理しようとしたが、これはイベリア諸国の布教保護権を制限することにつながるため、実現に四半世紀以上の時を要した²⁹⁾。

28) キリシタン時代に制作された《雪の聖母》については、結城了悟『キリシタンのサンタ・マリア』長崎：日本二十六聖人記念館、1979年、93-95頁。イエズス会と兄弟団活動の関係をめぐっては、川村信三『キリシタン信徒組織の誕生と変容—「コンフラリヤ」から「こんふらりや」へ』教文館、2003年、31-188頁。

29) Jean-Baptiste Etcharren, "Situation Religieuse en Extrême-Orient au XVII^e Siècle," in: MET, *op. cit.*, pp.16

グレゴリウス15世の後継者ウルバヌス8世は、出身家門のバルベリーニ家を重用し、1632年より布教聖省の長官はバルベリーニ一門が独占していた。ところが、1644年に即位したインノケンティウス10世は、教皇庁におけるバルベリーニ家の影響力を排除したため、45年に布教聖省長官に任命されたばかりの前教皇の甥アントニオ・バルベリーニ枢機卿は、二人の兄弟枢機卿とフランスへ避難し、宣教事業の教皇庁中央集権化も後退することになった。ちなみにアントニオとともにフランスへ逃れたフランチェスコ・バルベリーニは、ブッサンのパトロンとして知られる。画家はザビエルを主題とした作品(図29)を数点残しているが、これに関しては、ザビエルがアジア宣教の先駆者として称揚されたということばかりでなく、彼の顕彰にフランスやフランス人画家が関わってきたことに、注目すべき意味があるだろう³⁰⁾。

1653年にローマへ帰還したアントニオは、長官職に復帰する一方、キージー門をはじめとする親仏派枢機卿を束ねて、1655年にファビオ・キージ枢機卿をアレクサンデル7世として選出することに成功した。新教皇は4名のフランス人司祭を使徒座代理区長に指名し、彼らをカナダとアジアの宣教地に派遣することにした。彼らを中心に、彼らと養成経験を共有する同輩聖職者や彼らに随行した宣教師を中心に組織された団体が、これまで何度も言及したパリ外国宣教会である。1663年にはバック通りに神学校が開設され、翌年正式に発足した³¹⁾。

17世紀後半のフランスは、ナントの王令によりキリスト教の宗派抗争が一定収束し、篤信家と呼ばれるカトリック・エリート層と、ウド会、サン・シュルピス会など、内省的宗教実践と社会における他者の霊的救済を目指した宗教結社が次々に設立された。パリ外国宣教会もそうした団体の一つで、イエズス会学院学生を主体とした「良友会」が、宣教会の活動に加わる聖職者の養成に寄与し、「パリ聖体会」が宣教師派遣準備や経済的援助をおこなっている³²⁾。

イエズス会との関係を見ると、両者の間で非難や糾弾の応酬がなされたこともあるが、パリ外国宣教会でザビエルが宣教活動の理想として扱われていることからわかるように、決して

-23-

30) Exh. Cat. *Poussin et Dieu, L'album de l'exposition*, Paris: Musée du Louvre, 2015, pp. 8-9. フランチェスコ・バルベリーニとブッサンとの関係については、2015年7月25日に京都大学で開催された日仏美術学会関西例会発表、倉持充希「ブッサン作《聖エラスムスの殉教》-サン・ピエトロ聖堂におけるフランス人画家ブッサンの挑戦」において、詳しく述べられた。布教聖省とバルベリーニ家の関係については、板野2011、前掲書、60-64頁。ブッサンが描いた《ザビエルの奇跡(日本の鹿児島で死んだ娘を蘇らせる聖フランシスコ・ザビエル)》については、木村三郎『ニコラ・ブッサンとイエズス会画像の研究』中央公論美術出版、2007年、117-136頁。

31) Gérard Moussay, "Les Débuts de la Société des Missions Étrangères." in: MET, *op. cit.*, pp. 24-43.

32) 坂野2011、前掲書、65-66頁；坂野正則「17世紀におけるパリ外国宣教会の編成原理」『武蔵野大学人文学会雑誌』43 (3,4)、2012年、53-155頁。

常に敵対的であったわけではなかった。しかしながら、イエズス会はフランスでは1763年3月8日に廃止され、1773年7月には教皇クレメンス14世によって活動を禁止されている。その復興は1814年にピウス7世の小書簡によって許可されるが、再来日を果たしたのは1908年なので、幕末から明治にかけての日本の再宣教を牽引したのはパリ外国宣教会であった。ちなみに、中国での事情はやや異なり、イエズス会との歴史的な関係はあるものの、現在の政府公認のカトリック組織である中国天主教愛国会は、教皇庁から認められていない。

3 出現とヴィジョン

西洋思想の根本には神の存在証明があるのだが、像を忌避する諸宗教、諸宗派とは異なり、カトリックでは、霊的存在を可視化し現実の感覚で捉えられるように、受肉したイエスの存在や聖顔や聖像などの宗教的イメージが、認められてきた。受胎告知として知られる主題が、エコノミーの語源であるオイコノミアと呼ばれたのも、難解な思想を経なくても、生まれてくる子が神の存在を証明することになるために他ならない。しかしながら、美術の主題として聖誕の場面が描かれ始めるのは13世紀のことであり、誕生そのものよりもむしろ、イエスが東方からきた三博士にしめされる場面が、エピソード、すなわち神の顕現として崇敬された。

325年の第一回ニカイア公会議における論争を経て、キリストの神性が認められた後、神の似姿であるキリストに基づくその画像もまた、やがて聖像論争を引き起こすことになる。画像を崇敬に値するものとする主な解決法は、それが福音書記者にして画家でもあった聖ルカの筆になるとか、人の手を経ることなくキリストの顔がそのまま布に転移したなどといった、人為を超えた生成譚を像に付帯させることである。さらには、二次元の像に基づき三次元のヴィジョンを見るという独特の体験の報告が、想像力を活性化し、観察眼を鋭いものとし、西洋美術において、現実の転写としての像そのものの再現性を発達させたといえる³³⁾。

431年のエフェソス公会議における論争を経て、イエスの母マリアがテオトコス（神の母）として認められたとき、このナザレの女性はさまざまな属性を帯びることになるが、そこに神性はなかったはずである。しかしながら、聖母崇拜が高まりを見せる中世末から近世初期にかけて、超自然的な仕方です「出現」する聖母が、民間で広く崇敬されるようになった。その最たるものが、「無原罪の宿り」の聖母である。聖母自身の無原罪の誕生、すなわち聖母の母アンナの神的な受胎を意味するこの概念は、『ヨハネによる黙示録』第12章に記された「黙示録の女」と

33) *Lexikon der christlichen Ikonographie*, vol. 2, Rome, 1968, pp. 345-346.



(図29) ニコラ・プッサン《ザビエルの奇跡（日本の鹿児島で死んだ娘を蘇らせる聖フランシスコ・ザビエル）》1641-42年、油彩、布、444×234cm、ルーヴル美術館



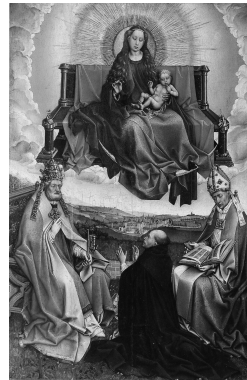
(図31) ロベール・カンパン《聖誕》1420年、油彩、板（オーク）、87×70cm、ディジョン市立美術館（フランス）



(図33) レオナルド・ダ・ヴィンチ《岩窟の聖母》1483-86年、油彩、板、199×122cm、ルーヴル美術館



(図30) ハンス・メムリンク〈パトモス島のヨハネ〉《聖ヨハネ三連画》右翼、1474-79年、油彩、板（オーク）、176×78.9cm、メムリンク美術館、右上に「黙示録の女」が浮かんでいる。



(図32) ロベール・カンパン工房《寄進者、聖ペテロ、聖アウグスティヌスがいる聖母子》1430年代、油彩、板（オーク）、グラネ美術館、エクス＝アン＝プロヴァンス（フランス）

呼ばれる、大空に浮かび悪竜と戦う女性のイメージ（図30）に基づくと考えられる³⁴⁾。

公式に神性が付与されることがなかった女性に、民間信仰から発生したこの概念は、神性を与えることになる。大地母神信仰を背景として発達した聖母信仰は、「謙譲の聖母」（図31）など聖母がそのまま大地と接触するという図像を生んできた。その一方で、「無原罪の宿り」は、神性を有したイエスを抱く姿で、大空に浮かぶ図像を発達させた（図32）。あるいは、「無原罪の宿り」信心会の発注になるレオナルド・ダ・ヴィンチの《岩窟の聖母》（図33）では、光だけは通す岩窟という無原罪の胎内にいる姿で、大地に関わる聖母の人間的属性と、神性を含意する「無原罪の宿り」の概念との折り合いがつけられている³⁵⁾。

神性を帯びるまでに発達した聖母像に対するプロテスタントからの攻撃に対して、カトリックによる対抗宗教改革の流れを生んだトレント公会議以降は、幼子イエスとの関わりでいえば、単独の幼児像や、幼児イエスの手を引く聖ヨセフやパドヴァの聖アントニウスなどの男性聖人が新たに増えてくるのに対して、イメージ世界の中では、単独で描かれた聖母が、まるで女神として君臨し始めたように思われる。すなわち従来の「無原罪の宿り」の聖母は、神であるイエスを抱いて空に浮かぶので、天空にいることに根拠があったのだが、17世紀以降は、スペインに数多く見られるように、単独の聖母が女神のような威厳をもって地上を見下ろすようになる（図34）。

また同時に、原罪を免れた聖母は最後の審判を免れて天国に行けるという考えを生み、「聖母被昇天」の図像が発達した（図35）。「無原罪の宿り」は「聖母被昇天」のイメージと融合し、たとえばムリリョの「無原罪の宿り」の聖母は、大地を見下ろすのではなく、高き所を見上げながら空中に浮かぶ（図36）。

困難な時に出現してくる聖母は、こうした超越的力をもつ尊格として「目撃」されている。聖母の出現は世界中で数千例が報告されているが、教皇庁が公認したものは16例ほどにとどまっている。これらの例の中で、すでに述べたグアダルーペの聖母以前のもものは、13世紀の「雪の聖母」や「カルメル山の聖母」など、わずか3例だけである³⁶⁾。

34) 空に浮かぶ無原罪の宿りの聖母については、拙著「ボイマンス・ファン・ボイニンへ美術館所蔵の《栄光の聖母子》像について」『日蘭学会会誌』第17巻第1号（1992年）21-49頁；今井澄子「ロベール・カンパン作《太陽の聖母子》の図像系譜と成立背景をめぐって」『美術史』56（2006）、98-113頁。

35) 岡田温司「レオナルド『岩窟の聖母』再考」京都大学文学部美学美術史研究室『研究紀要』5（1984）、44-74頁；斎藤泰弘「『岩窟の聖母』の図像の神学的解釈序説—ロンドンの聖母は無原罪の宿りを表現しているのか否かをめぐって」『イタリア学会誌』45（1995）、25-52頁。

36) 聖母の出現については、シルヴィ・バルネイ（近藤真理訳『マリアの出現』せりか書房、1996年；関一敏『聖母の出現—近代フォーカ・カトリシズム考』日本エディタースクール出版部、1993年。



(図34) ディエゴ・ベラスケス
《無原罪の御宿りの聖母》
1618年、油彩、布、135
×102cm、ナショナル・
ギャラリー、ロンドン



(図35) パウル・リュベンス《聖
母被昇天》1625-26年、
油彩、板、490×325cm
アントウェルペン大聖
堂（ベルギー）



(図36) バルトロメ・ムリリョ
《無原罪の御宿りの聖
母》1678年頃、油彩、
布、274×190cm、プラ
ド美術館、マドリード

ゲアダルペの聖母が聖別されるのは1754年のことだが、すでに述べたように、ディエゴのマントに映った姿は、イエスの聖顔布やトリノの聖顔布の伝説を思い起こさせる。このような仕方で、聖母が帯びるようになった神性に対応する物語が、形成されたと考えられる。この物語には派生的な後日談があり、聖堂を建てたデ・ズマラガ司教のマントにも聖母の姿が映るのである。こうした像の転移、すなわちアケイロポイエートス（人の手によらない像の生成）的な聖母像は、19世紀のフランスに形を変えて現れることになる。

聖別された聖母の出現としては、ゲアダルペとほぼ同時代の1664年から1718年にかけて、フランスのサン＝ティエンヌ＝ル＝ロウにおいてブノワット・ランキュレルに現れた「ロウの聖母」をあげることができる。19世紀にはさらに急激に増加し、1830年に愛徳姉妹会の修練者カトリーヌ・ラブレに出現した「不思議のメダイ」、1840年に同じくフランスの愛徳姉妹会の修道女ジュスティヌ・ビスケイブリュに現れた「緑のスカプラリオの聖母」、1846年の「ラ・サレットの聖母」、1858年の「ルルドの聖母」、1871年の「ポンマンの聖母」など、フランスに集中的に表れているのは、フランス革命時のカトリックの不遇と無関係ではないだろう。³⁷⁾

37) 19世紀フランスにおけるマリア出現については、関根、前掲書、53-54頁；柏木治「ルルドの奇蹟と聖母巡礼ブームの生成」『欧米社会の集団妄想とカルト症候群』浜本隆志編、明石書房、2015年、215-134頁。



(図37) 「奇跡のメダル」



(図38) 「緑のスカプラリオ (守裂)」

王政期のフランスにおいて、キリスト教は国教だったのだが、フランス革命期の1789年の共和国憲法において、教会財産は国有化され、1790年の聖職者民事基本法においては、教会は国家の支配下におかれ、組織としてのカトリック教会は消滅した。ジャコバン党支配下では、聖職者に対して聖職放棄と還俗化の推進がおこなわれ、処刑されたり亡命を余儀なくされたりした聖職者も少なくなかった。また、聖堂や聖像を破壊したり略奪したりするヴァンダリズムも横行した。

こうした混乱を收拾し第一執政となったナポレオン・ボナパルトとローマ教皇ピウス7世の間で政教条約が締結され、カトリックは「大多数の人の宗教」として復活したが、聖職叙任権と教会財産は国家に属することになった。その後皇帝となったナポレオンの失脚後、王政復古がなされた1814年に、フランスにおいて再びカトリックは国教化され、また、イエズス会も復活する。しかしながら、1830年には国教化が廃止され、1848年には再びカトリックの地位が不安定になり、最終的に1905年に政教分離がなされた。

こうして、共和政と王政の間で政治体制が揺れ動く中、カトリックに危機が訪れるたびに、聖母の出現が報告されているのは注目に値するものの、出現譚そのものに、このような政治的変動と直接的関連を示すものは含まれていない。しかしながら、19世紀聖母出現群の一般的特徴が、カトリック教会の介入以前に信仰の自然発生過程を経験したものであったのに対し、パリ外国宣教会の本部のあるバック通での出現は聖堂内部で起こったことであり、メダルやスカプラリオなど具体的な信仰具の流布とそれに対する信仰を促した点で注目される。

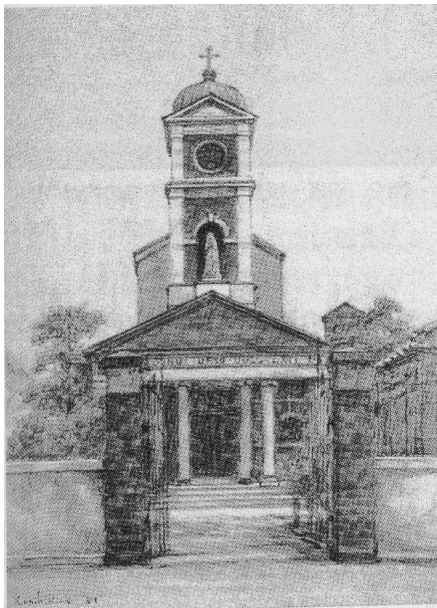
1830年に愛徳姉妹会の修練者カトリーヌ・ラブレに出現した聖母は、自らが布に映るのでは



(図39) ジョゼフ・ファビッシュ 《ルルドの聖母》
ルルド (フランス)



(図40) 《ルルドの聖母》19世紀、模像、井持浦教会、五島玉之浦



(図41) 《聖心の聖母》下から見上げる位置に置かれていた像、創建当時の横浜聖心教会、完成されたファサード



(図42) 《日本の聖母》下から見上げた像、大浦天主堂、2015年3月17日撮影

なく、裏と表に彫るべき図柄を視覚化して伝え、そのメダルの鑄造を託したという（図37）。告解神父アラデルの仲介で、メダルの鑄造はパリ大司教ド・ゲランに認可されたのだが、1832年6月末に鑄造された当初は、その由来が説明されることもなく、姉妹会のメンバーの手で1500個がパリ市中に頒布された。頒布されると、当時パリを脅かしていたコレラの厄払いとして民衆の受け入れるところとなり、「奇蹟のメダイ」として評判になった。増産、物語の公表がなされたが、ラブレの名前が公表されたのは後になってからのことである³⁸⁾。

1840年に、同じく愛徳姉妹会に入会する準備のために、リユー・デュ・バック聖堂で祈りを捧げていたジュスティヌ・ビスケイブリュの前に、白いガウンと薄い青のマントを纏った聖母が、明るい炎がともる「穢れなき御心」をもった姿で現れた。この出現は数度続くが、ブロンジの聖堂で祈っていたとき、聖母は剣で貫かれたハートと金の十字架が書かれた布（図38）を示した。この布が魂を救済する道具として広く普及することを望んでいるとカトリーヌは悟ったが、ラブレの場合と同じくアラデルによって普及され、1870年に教皇ピウス9世の承認を得ることになった。

これに続いて1846年アルプスの山中の村ラ・サレットにおいて「ラ・サレットの聖母」と呼ばれる聖母がメラニー・カルヴァとマキシマン・ジローという二人の子供の前に現れ、神を冒瀆する行為に対する警告を発した。この出来事は彼らの周辺の人々にすぐに知られるところとなり、発達してきたジャーナリズムを通して国中に広まって、改革派と保守派、あるいは教会支持派と教会反対派との間で大論争を巻き起こした。

1858年に南仏ルルドでベルナデッタ・スピルーの前に18回連続して出現した聖母は、そのとき発見された「泉」の治癒力も合わせて、急速に広まっていくことになる。聖母が自ら名乗ったといわれる「無原罪の宿り」に捧げられた聖堂や「ロザリオ」に献堂された聖堂をはじめ、周辺が大規模に増築された洞窟内には、リヨンの彫刻家ジョセフ・ファビッシュによって作られた聖母像（図39）が置かれている。彫刻家は出現した聖母の詳細をベルナデッタから直接聞いて制作したといわれるが、ベルナデッタはその出来を褒めながらも、彼女が見た聖母との違いを強調したとされる。

この像は1864年4月4日にマッサビエルの洞窟に安置され、またたく間に公認された像の複製が作られ、世界中に広まった。わが国では、ローマのヴァチカン宮殿の庭に模造ルルドが造られたことを伝え聞いたペルー神父が、五島玉之浦の井持浦教会の敷地に作らせたのが最初

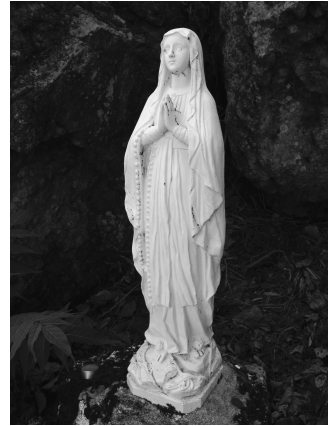
38) この物語には大きく2種類があり、聖母の姿も「無原罪の宿り」を基本としながら、アラデル版は手から光が放たれる「光の聖母」の図像であるが、ラブレの手記に基づく物語では、聖母は光を放ちながら両手に地球をもつ姿で表された。関、前掲書、115-148頁。



(図43) 《奇跡のメダイ》1830年、ヨーロッパ製、真鍮製、表：無原罪の宿りの聖母、裏：モノグラム、心臓、星刻銘、東京国立博物館



(図44) 《スカプラリオ（守裂）》19世紀、ヨーロッパ製、東京国立博物館、1879年内務省社寺局引継。



(図45) 《ルルドの聖母》20世紀、模像、鶴島（岡山県）、浦上信徒の配流地のひとつ。

である（図40）。

ルルドの聖母像を制作したファビッシュを例外として、聖母の出現の痕跡をとどめたメダイやスカプラリオの原作者は知られておらず、金属、版画、写真、布などさまざまなメディアの表層を通過しながら広がったイメージである。19世紀の再布教に際して日本に到達した美術は、このような教会危機の時代に、民衆の宗教として再出発したイメージなのである。

4 結びにかえて

ここでは19世紀の日本再宣教をおこなったパリ外国宣教会の成立と活動を概観する中で、19世紀におけるキリスト教美術伝来の一端を扱った。祖型に基づき量産されていたと思われるこうしたイメージを、近代的な意味での美術作品と呼ぶには無理があるのかもしれないが、機械的複製技術が登場した19世紀はまさに、そのような近代的芸術概念が大きく揺らぎ始めた時期でもあった。

日本再宣教の目的で琉球に入ったフォルカード神父は琉球を「聖母の御心」に捧げ、また、通訳という立場ではあったが、はじめて江戸に入ったジラル師は、横浜天主堂を「イエスの御心」に捧げた。これらの「聖心信仰」もまた、「無原罪の宿り」と同じく、民間信仰の現場から発達したものである。

現在は横浜山手教会の庭に置かれている《聖心の聖母》像（図41）は、元来は聖堂の屋根の

上に置かれていたことからわかるように、天空にいて地上を見下ろす、19世紀的出現のイメージを模していた。浦上信徒の出現を記念してプチ・ジャン神父が設置した長崎大浦天主堂の《日本の聖母》像（図42）も、その開眼式のイルミネーションについてクーザン神父が記録しているように、光の中に聖母が出現したように見え、また実際、石段の下から見上げるならば、高いところからわれわれを見下ろす、まさに天空での出現をイメージして設置されたことがわかる。

浦上4番崩れでの信徒からの没収品の中には「奇蹟のメダイ」（図43）や「緑のスカプラリオ」（図44）とはほぼ同じイメージを見出すことができ、同じバック通で活動していたパリ外国宣教会と愛徳姉妹会が、危機を共有するカトリックの団体として関係していたことがうかがえる。

四番崩れで西日本一帯に広がる配流地には、ルルドの聖母や光の聖母の模刻像（図45）がおかれ、かつてのキリシタン殉難の地にも信徒発見の聖母の模刻像が見られる。これらの像は、まさにその地に出現したキリシタンの痕跡を聖母と共に留め続けるものなのである。

図版出典一覧

『大浦天主堂及び教会施設調査報告書』長崎市、2012年

（図18a）（図18b）（図19）（図20）（図28）（図44）

『世界美術大全集』小学館

Vol.12（図33）、Vol.14（図30）、（図31）、Vol.16（図34）（図36）

「日本における模造ルルド発生考—パリ外国宣教会の日本における再布教との関係から」関根浩子著『崇城大学芸術学部研究紀要』7（2013年）、56-57頁

（図40）（図43）

『横浜天主堂・カトリック山手教会150年史』2014年

（図1）（図4）（図41）

『油彩への衝動』中央公論美術出版、2015年

（図11）（図12）（図13）

『ルルドの奇蹟—聖母の出現と病気の治癒』エリザベート・クラヴリ著、創元社、2010年

（図37）（図39）

Schleier und Spiegel : Traditionen des Christusbildes und die Bildkonzepte der Renaissance, by Gerhard Wolf, München, 2002.

（図24）

Peter Paul Rubens : Bildgedanke u. künstler. Form, by Hans Kauffmann, Berlin, 1976.

（図35）

展覧会図録『聖母が見守った奇蹟—長崎の教会群とキリスト教関連遺産』2015年

（図7）（図9）（図16）（図17）

Exh.Cat. *Poussin et Dieu, L'album de l'exposition*, Paris: Musée du Louvre, 2015.

（図29）

Exh. Cat. *La Fabrique des saintes images, Rome-Paris 1580-1600*, Paris: Musée du Louvre, 2015.

(図10)

Exh.Cat. *Backlit Heaven*, Lamlot, Mechelen, 2009.

(図25) (図27)

Exh.Cat. *Der Meister von Flémalle und Rogier van der Weyden*, Frankfurt am Main: Städel Museum, 2008.

(図32)

<https://ja.wikipedia.org/> [2015年10月30日確認]

「サン＝ロラン聖堂」(図8)「雪の聖母」(図26)、「スカプリアオ」(図38)

筆者撮影

(図2) (図3) (図5) (図6) (図9) (図14) (図15) (図21a) (図21b) (図22) (図23a) (図23b)

(図42) (図45)